

小学校英語の授業実践に対する自信を育む教育方法に関する研究  
－教員養成大学に所属する学生の意識調査からの考察－

Research on Educational Methods to Develop Confidence in English Class Practice at  
Elementary Schools: Considerations from an Attitude Survey of Students Affiliated  
with a Teacher Training University

小山内 早苗

要 約

本研究は現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の初等教科教育法（英語）受講の学生が、自己評価として「小学校英語の授業を行う自信」をどの程度有しているのかについて測定するとともに、各英語運用能力に対する自信との相関分析を行った。そして授業を行う自信に、どの英語運用能力に対する自信が関係するのかを明らかにする。そして、導出された結果に基づき、教員養成大学が提供すべき、学生の自信を高める教育アプローチを提案した。その結果、小学校英語の授業を行う自信を育む教育アプローチの中で特に重点的に行うべきことは、学習者自身の考えを英語で表現する力を育むアクティビティであることが明らかとなった。

キーワード：外国語教育、英語運用能力、小学校教育、教員養成、自信

1 はじめに

1－1 研究の背景と必要性

世界は、現在急速なグローバル化を遂げている。加速するグローバル化により情報や商品、人的資本までもが国境を越え活発に移動することとなり、多言語を使用する機会は今後も増加すると予想される。世界には7,000以上の言語が存在するが(Ethnologue 2022)<sup>[1]</sup>、世界で最も話者人口が多い言語は英語であり、15億人以上が実用レベルで使用している(WIP Japan Cooperation 2024)<sup>[2]</sup>。前述した内容を踏まえ、今後グローバル化が加速していく社会において、英語を実用レベルで利用できる人材を育成していくことの必要性は大きいと考える。そのため、公教育において、教員が児童・生徒の英語力向上に資する教育を提供することが重要である。

公教育の中でも、本研究は特に小学校にお

ける外国語教育（以下より英語教育と表記）に着目する。ヒトの脳は8歳から10歳頃にかけて言語野が発達のピークを迎え、その時期は脳の可塑性が大きく、言語習得の効率が高まるため(IBS 2022)<sup>[3]</sup>、小学校教育における英語教育は、学習者である児童にとって英語を習得する絶好の機会であると考えられる。そのため、本研究では小学校教育において、児童の英語力向上に資する英語教育を実践できる教員を輩出するために、教員養成大学はどのような学びを学生に提供すべきかを検討する。以上を踏まえ、本研究は、グローバル化が進む社会における、英語を実用レベルで利用できる人材育成のあり方について、教員養成の観点から教育的示唆を行うという点において必要性があると考えられる。

## 1-2 先行研究レビュー

小学校英語に携わる教員養成のための教育手法を検討するに当たり、日本の教育現場における小学校英語の変遷と既存の研究の流れを把握する必要がある。そこで、まずは現在小学校で実施されている英語教育の現状とそれに至るまでの経緯を概観する。2011年度より全面実施された小学校における学習指導要領では、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」の必修化が明記された<sup>[4]</sup>。また、2020年度、小学校における英語教育が正式に実施されることとなり、第3・第4学年でも外国語活動が開始され、第5・第6学年においては一つの教科として英語が導入されることとなった<sup>[5]</sup>。このように小学校における英語の教科化が正式に始動することを契機とし、小学校の教員免許取得を目指す学生に対し教職課程において英語を含む外国語科目を履修するよう義務付ける旨を記した省令改正案が文部科学省により2017年7月に公表された<sup>[6]</sup>。また、教員養成の段階から小学校教員の英語の指導力を育成するために、2019年度より英語の指導法に関わる科目の単位を取得することが必要となった<sup>[7]</sup>。このように、教育現場は2011年度より第5・第6学年を対象とした「外国語活動」必修化の流れを受けたが、同時期には、実際に教員が英語を外国語活動の中で指導する際に直面する実態や課題について検討する研究も行われるようになった。小学校における英語教育の実態に関するこれまでの研究では、教科化・低学年化に対する教員が指導上で直面する課題について（2016 米崎ら）<sup>[8]</sup>、また、小学校教員の英語運用能力への自己評価に関して言及されてきた（渡部 2010）<sup>[9]</sup>。さらに、小学校教員を目指す学生の英語の授業への自己評価に関する研究もあり、学生の自己評価と共に TOIEC の得点によって英語運用能力も評価することで主観的・客観的実態が包括的に分析されている研究もあるが（酒井&内野

2018）<sup>[10]</sup>、学生への教育アプローチの具体的な方法が提言されている研究は所見の限り見当たらない。また、前述の通り、本研究は特に小学校英語の授業を行う自信に着目する。英語を英語母語話者ではない教員が指導するに当たり直面する課題について指摘する研究はこれまでも行われてきたが、その中でも特に、教員が英語の授業を行うことへの自信のなさについて言及するものがある（林 2020<sup>[11]</sup> Waterfield 2019<sup>[12]</sup>）。英語母語話者ではない教員が、英語母語話者に及ばない自身の能力に限界を感じ、授業を行うことへの自信を失っている実態を指摘する研究もあるが（Chen & Goh 2011<sup>[13]</sup> Song 2016<sup>[14]</sup>）実際は、英語母語話者ではない教員が授業を行うことで、教員自身も英語学習者であることから学習者が直面する困難を理解できるという利点もある（Benke & Medgyes 2005）<sup>[15]</sup>。だからこそ、日本の小学校の英語教育において、自信をもち授業を行うことが出来る教員を養成するために、教員養成大学の学生にどのような授業を提供すべきであるか、筆者自身が行っている授業内容を定性的に分析し、どのような要素が学生の英語の授業を行う上での自信の向上に影響を与えるのか検討する必要がある。

## 1-3 研究目的

前述した内容を踏まえ、本研究の目的は大きく2つある。1つ目は、学校法人興誠学園浜松学院大学現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の初等教科教育法（英語）受講の学生の「小学校英語の授業を行う自信」を測定し、実態を明らかにすることである。そして2つ目は、「小学校英語の授業を行う自信」と、英語運用能力（スピーキング：やり取り・スピーキング：発表・リスニング・リーディング・ライティング）に対する自信との関係性を明らかにすることによって、教員養成大学が提供すべき、学生

の自信を高める教育アプローチを提案することである。

## 2 研究方法と対象

### 2-1 研究方法

ここでは本研究で採用する研究方法について、各研究目的に対応する形で示す。なお、研究目的は前節で提示した通りであり、1 つ目の研究目的に対応するものを方法 1 とし、2 つ目の研究目的に対応するものを方法 2 とする。

方法 1：現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の初等教科教育法（英語）受講の学生が、自己評価として「小学校英語の授業を行う自信」をどの程度有しているのかについて、リッカート尺度の中でも特に 4 件法で回答を求める。具体的には、「小学校英語の授業を行う自信がある」という項目に対し、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「全く当てはまらない」の中から最も自身の考えに近い選択肢を学生が選択する。自信は学生自身の自己評価に基づくものだが、自信の有無を問う二者択一的な質問では得ることができない、段階的な自信の度合いを測定することで、より詳細な学生の実態把握を行う。

方法 2：現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の初等教科教育法（英語）受講の学生が、英語運用能力に対する自信をどの程度有しているのか、スピーキング：やり取り・スピーキング：発表・リスニング・リーディング・ライティングの 5 項目それぞれについて、4 件法で回答を求める。各 5 項目の調査結果と方法 1 で示した「小学校英語の授業を行う自信がある」という項目の調査結果を用いて相関分析を行い、相関係数を算出することで、授業を行う自信に、どの英語運用能力に対する自信が関係するのかを明らかにする。そして、導出された結果に基づき、学生に対する小学校英語の授

業を行う自信向上に資する要素を取り入れた授業のあり方を検討するとともに、教員養成大学が提供すべき、学生の自信を高める教育アプローチを提案する。

また、方法 1・方法 2 共に、その調査は 2024 年 10 月の「初等教科教育法（英語）」の最初の授業開始時にアンケート形式で実施されたものである。

### 2-2 調査対象

対象は、学校法人興誠学園浜松学院大学現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の初等教科教育法（英語）受講の学生 28 名（2 年生：23 名、3 年生：3 名、4 年生：2 名）である。

### 2-3 質問項目

表 1：学生の小学校英語の授業を行う自信と英語運用能力に対する自信についての質問

	質問内容
問 1	教員になった際に、小学校英語の授業を行う自信がある。
問 2	英語で対話することに自信がある。
問 3	英語で発表すること（プレゼンテーション等）に自信がある。
問 4	英語を聞き取り、内容を理解することに自信がある。
問 5	英語の文章を読み取り、内容を理解することに自信がある。
問 6	自分が表現したい内容について、英語で書くことに自信がある。
問 7	英単語の語彙量に自信がある。
問 8	英文法の知識に自信がある。
問 9	英語を話す際の発音に自信がある。
問 10	今後グローバル化が進むにつれ、日本人が英語力を向上させる必要性は高まっていく。

表 1 で示した通り、問 1 は学生の小学校英語の授業を行う自信について問うものであり、問 2 から問 9 までは学生の英語運用能力をはじめとする英語を使用する際に関わるスキルに対する自信について問うものである。そして問 10 は英語教育の必要性を学生がどの程度感じているか、その意識を問うものである。なお、前述した内容でも触れたが、学生はこれらの問 1 から問 10 に対し、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「全く当てはまらない」の中から最も学生自身の考えに近い選択肢を選択するものとした。

表 2：学生が考える小学校英語の授業を行う際に最も重要である要素（選択肢）

番号	選択肢の内容
1	聞く、話す、読む、書く等の英語運用能力
2	児童とのコミュニケーション能力
3	英語を学ぶ際に直面する困難点への共感力
4	ALT（Assistant Language Teacher）と協働して授業を行う連携力
5	その他

表 2 は、学生が考える小学校英語の授業を行う際に最も重要である要素について問う質問に対応する選択肢を示している。なお、これらの選択肢に対応する質問は「教員として小学校英語の授業を行う際に、最も重要であることは何であると思いますか。以下の選択肢 1～5 から最も重要であると思うものを一つ選択し、○をつけてください。5 その他を選択した方は、具体的な内容を記述してください。」とした。

## 2-4 倫理的配慮

筆者は被験者に対し、アンケート調査の内容は、研究のみに使用され、学術的な目的以

外に使用されることはない旨、またデータは統計処理されるため個人が特定されない旨について、さらに調査後のアンケート用紙は一切外部に公表されることなく、調査実施担当責任者によって厳重に保管されることも口頭・文書で説明した。前述の説明に同意した被験者にのみ本研究に協力してもらうこととした。

## 3 研究結果

### 3-1 研究目的 1 に対応する結果

アンケート調査の結果について言及する前に、最終的な分析対象者の人数とその内訳について説明する。研究参加者は研究対象者 28 名中同意の得られた 22 名となった。さらに回答に不備のあった 1 名を除き、分析対象者は 21 名となった。

本研究の 1 つ目の目的は、学生の「小学校英語の授業を行う自信」を測定し、実態を明らかにすることである。この目的に対応する結果を図 1 に示す。

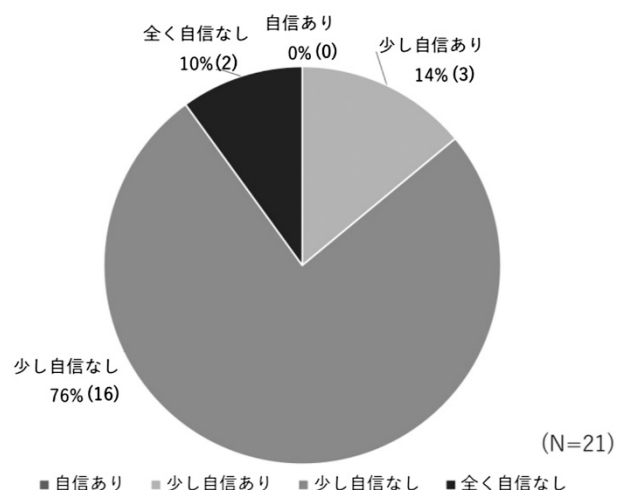


図 1：学生が教員になった際に小学校英語の授業を行う自信

図 1 は学生が教員になった際に小学校英語の授業を行う自信があるのかを問うた質問に対する結果を示しており、強く当てはまるを「自信あり」やや当てはまるを「少し自信あり」やや当てはまらないを「少し自信なし」



強く当てはまらないを「全く自信なし」に対応させた。結果の分布は、自信のあるものが0%、少し自信のあるものが14%、少し自信のないものが76%、全く自信のないものが10%であり、少し自信がない・全く自信がない学生は合計86%に及んだ。ここから言えることとして、学生の「小学校英語の授業を行う自信」の実態として、調査を行った段階においては、多くの学生が小学校英語の指導に不安を感じている様子を読み取ることができた。

### 3-2 研究目的2に対応する結果

2つ目の研究目的は、「小学校英語の授業を行う自信」と、英語運用能力（スピーキング：やり取り・スピーキング：発表・リスニング・リーディング・ライティング）に対する自信との関係性を明らかにすることによって、教員養成大学が提供すべき、学生の自信を高める教育アプローチを提案することである。この目的を達成するために「小学校英語の授業を行う自信」と各英語運用能力に対する自信との間にどのような相関があるのかを分析した。

図2は「小学校英語の授業を行う自信」と英語運用能力への自信に関する質問のスコア間の相関行列である。この相関行列はアンケート調査の問1から問10までの各項目の相関係数を示したものである。なお、問1から問10までの質問項目は表1に示している。

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10
問1	1									
問2	<b>0.61</b>	1								
問3	<b>0.75</b>	<b>0.69</b>	1							
問4	<b>0.43</b>	<b>0.53</b>	<b>0.66</b>	1						
問5	<b>0.32</b>	<b>0.36</b>	<b>0.69</b>	<b>0.59</b>	1					
問6	<b>0.20</b>	<b>0.51</b>	<b>0.44</b>	<b>0.40</b>	<b>0.70</b>	1				
問7	<b>0.27</b>	<b>0.25</b>	<b>0.53</b>	<b>0.54</b>	<b>0.69</b>	<b>0.51</b>	1			
問8	<b>0.31</b>	<b>0.47</b>	<b>0.63</b>	<b>0.21</b>	<b>0.74</b>	<b>0.63</b>	<b>0.63</b>	1		
問9	<b>0.59</b>	<b>0.60</b>	<b>0.84</b>	<b>0.56</b>	<b>0.60</b>	<b>0.46</b>	<b>0.46</b>	<b>0.51</b>	1	
問10	-0.0	0.15	<b>0.33</b>	<b>0.39</b>	<b>0.34</b>	<b>0.22</b>	<b>0.42</b>	<b>0.41</b>	<b>0.20</b>	1

図2：小学校英語の授業を行う自信と英語運用能力への自信に関する質問のスコア間の相関行列

また、相関係数 0.7~1.0 はかなり強い正の相関、0.4~0.7 は正の相関、0.2~0.4 は弱い正の相関、0~0.2 はほとんど相関がない、ということを示している。本研究では特に、太字で示されている相関係数 0.4~1.0 までの結果に着目する。

ここからは、図2で示されている結果を基に、「小学校英語の授業を行う自信」と各英語運用能力に対する自信との間にどのような相関があるのかを概観する。問1と問3の相関係数は0.75であり、これが意味することは、小学校英語の授業を行うことに対して自信があることと英語でプレゼンテーション等発表をすることへの自信があることには、かなり強い相関があるということである。つまり、教員養成大学は、英語を用いたプレゼンテーションのように、英語で自身の考えを発信する機会を学生に提供し、その自信を育むことで、学生が教員として将来的に小学校英語の授業を行うことへの自信を育むことができるようになる可能性が示唆された。次いで問1と問2の相関係数が0.61と、正の相関が確認された。これは、小学校英語の授業を行うことに対して自信があることと英語で対話することへの自信があることには、相関があるということの意味している。つまり、学生の英語での対話への自信を育むことも、学生が自信をもって小学校英語の授業を行うためには重要な点であるということである。また、問1と問9の相関係数は0.59であり、正の相関が確認された。これは、小学校英語の授業を行うことに対して自信があることと英語の発音に対して自信があることには相関があるということである。そして問1と問4の相関係数は0.43であり、正の相関が見られた。これが意味することは、小学校英語の授業を行うことに対して自信があることと英語を聞き取り、内容を理解することに自信があることには相関があるということである。つまり、学生の小学校英語の授業を行うことに

対する自信を育むためには、学生自身の英語の聞き取り能力を向上させ、自信をもたせるための取組が必要であると言える。

表 3：小学校英語の授業を行うことに対する自信を育むために必要な英語運用能力ランキング

順位	英語運用能力
1 位	英語での発表 /プレゼンテーション能力
2 位	英語で対話する能力
3 位	英語を話す際の発音の正確性
4 位	英語の聞き取り力と理解力

前述した内容を踏まえると、学生の小学校英語の授業を行うことに対する自信を育むために必要な英語運用能力ランキングは表 3 のようにまとめられる。このランキングから、学生にとって英語を用いた発表やプレゼンテーション、英語での対話のような、学生自身の考えや意見などを発信する能力に対する自信を深めることが小学校英語の授業を行うことに対する自信を育むためには必要であるということを読み取ることができる。また、英語を用いて自身の考えを相手に伝える際に、正確な発音で話すことができると、聞き手に理解してもらえているという実感が生まれ、自信につながることも示唆された。さらに、対話のようなインタラクティブなやりとりの中では情報発信にとどまらず対話する相手から受け取る情報理解力も重要となる。つまり、学生の小学校英語の授業を行うことに対する自信を育むためには、学生が英語で自己表現をする能力やそれを支えるインタラクティブな英語運用能力も向上させる必要があると考えられる。そこで、教員養成大学が提供すべき、学生の自信を高める教育アプローチでは、英語でのプレゼンテーションのような発表の機会を学生に多く与えることや、次いで英語を用いた対話力を養うアクティビティの割合を増加させる等の工夫が必要であると言える。

そして、学生が英語を用いて自身の考えを発信するアクティビティの中で、正しい英語の発音練習や聞き取りのトレーニングを行うことも、学生の小学校英語の授業を行うことに対する自信を育むために有効な教育アプローチであるということが明らかとなった。

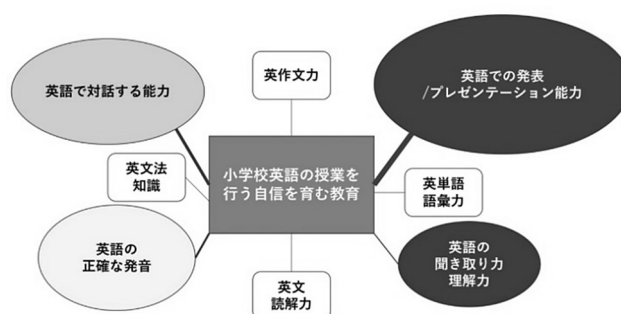


図 3：小学校英語の授業を行う自信を育む教育を構成する要素のネットワーク図

図 3 は、図 2 で示したスコア間の相関行列の中で「小学校英語の授業を行う自信」と各英語運用能力に対する自信との間の相関の強さを可視化したネットワーク図である。例えば、小学校英語の授業を行う自信を育む教育の実現には、英語での発表/プレゼンテーション能力への自信を育む取組が必要であり、その間にはかなり強い正の相関があるということを図 3 から読み取ることができる。なお、図 3 の小学校英語の授業を行う自信を育む教育を構成する要素は、ネットワークの太さが太ければ太いほど、要素の大きさが大きければ大きいほど強い相関があるということを表している。また、図 3 中の英作文力、英文法知識、英文読解力、英単語語彙力と、「小学校英語の授業を行う自信」との間には弱い正の相関があり、他の構成要素と比較すると小学校英語の授業を行う自信を育む教育を実現することに資する可能性は低い。しかしながら、小学校英語の授業を行う自信を育む教育にとって重要となる要素と複合的に組み合わせて授業をデザインすることで、より効果的な教育アプローチとなる可能性があると考えられる。

### 3-3 英語教育に対する意識調査の結果

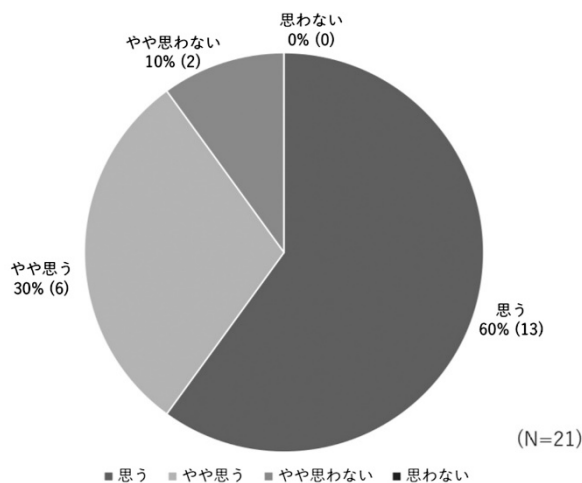


図 4：英語力を向上させる必要性は高まっていくと思うか

図 4 は、今後グローバル化が進むにつれ、日本人が英語力を向上させる必要性は高まっていくと学生が考えているのかどうかを問うた質問に対する答えの結果である。なお、4 件法「とても当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「全く当てはまらない」は、「思う」「やや思う」「やや思わない」「思わない」にそれぞれ対応している。

結果としては、英語力を向上させる必要性が高まると思う学生は 60%、やや思う学生は 30%、やや思わない学生は 10%であり、思わない学生は 0%であった。この結果が示唆することとしては、90%の学生が英語の必要性を感じていることが分かった。教員になった際に小学校英語の授業を行う自信がないと感じている学生が 86%いる一方で、今後グローバル化が進むにつれ、日本人が英語力を向上させる必要性は高まっていくと考えている学生が 90%いるということは、教員養成大学が小学校英語の授業を行う自信を育む教育アプローチを展開していくことが急務であることを示唆していると考えられる。

表 4：小学校英語の授業を行う際に最も重要であること

重要な要素	割合
聞く、話す、読む、書く等の英語運用能力	38%
児童とのコミュニケーション能力	38%
英語を学ぶ際に直面する困難点への共感力	5%
ALT と協働して授業を行う連携力	19%
その他	0%

表 4 は、教員として小学校英語の授業を行う際に、最も重要であることは何であると思うかを学生に問うた質問に対する回答をまとめた結果である。最も多くの学生が考える小学校英語の授業を行う際に最も重要であることは、同率で「聞く、話す、読む、書く等の英語運用能力」「児童とのコミュニケーション能力」（38%）であった。この結果から、学生が小学校英語の授業を行う上で、児童とのやり取りを通して教員の英語運用能力を授業実践に生かしたいと考えている様子を読み取ることができる。次いで、「ALT と協働して授業を行う連携力」（19%）が重要であるという結果となり、さらに次いで「英語を学ぶ際に直面する困難点への共感力」（5%）が重要であると学生が考えていることが分かった。ALT との連携は、教員が提供する体系的な授業の中で国際性を増す役割を果たす点において重要であると考えられている一方で、授業内容に直接的な影響を及ぼすことがない、児童の精神面に寄り添うことへの重要性は感じられにくい側面があるということが示唆された。前述した内容を鑑みると、学生は、教員として小学校英語の授業を行う際に授業の質に直接的に影響を及ぼす学生自身の能力を向上させることに重要性を感じているということが分かった。

#### 4 考 察

これまで示してきた調査結果を踏まえ、学生の小学校英語の授業を行う自信を育み、向上させるための教育アプローチについて考察する。前提として、英語の授業を展開する際に教員が有すべき資質・能力は多岐に渡るが、本研究では「授業を行うことへの自信」を養うことに特化した教育アプローチの効果的なあり方について議論してきたため、「授業を行うことへの自信」を向上させること以外への効果が得られるのかについて議論の余地はあるということを再度明記する。この前提を踏まえ、教員養成大学が提供すべき、学生の自信を高める教育アプローチを提案する。

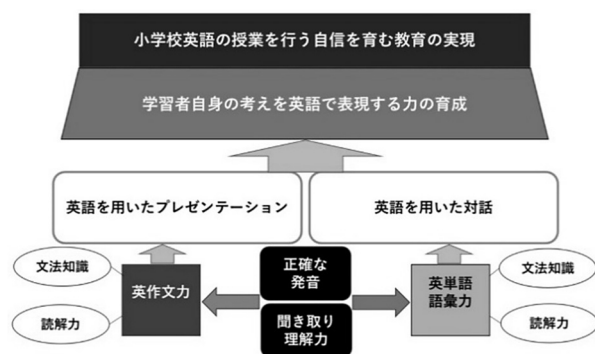


図5：小学校英語の授業を行う自信を育む教育アプローチを可視化したフローチャート

図5は、小学校英語の授業を行う自信を育む教育を、どのような方法で、またどのような内容を授業内で取り入れることによって実現できるのか、図2・図3で示した各要素の相関分析の結果を基に作成したフローチャートである。小学校英語の授業を行う自信を育む教育アプローチの中で特に重点的に行うべきことは、学習者自身の考えを英語で表現する力を育むアクティビティである。それらは英語を用いたプレゼンテーションや対話を通して行われる。プレゼンテーションや対話は、一方的な情報発信では成立しないため、並行して英語の正しい発音や、内容を聞き取り理解するためのトレーニングも行うべきである

と考えられる。また、プレゼンテーションは内容の事前準備が可能である一方で対話は偶発的かつ突発的な対応が求められるため、プレゼンテーション能力を高めるためのトレーニングとして、英作文を授業終了後の宿題として学生に課すことも有効であると考えられる。それに対し、対話能力を高めるためには、自身の考えを突発的なやりとりの中で英語化するトレーニングが必要である。そのためには英語の豊富な語彙力が求められるため、授業開始時、受講学生に対し英単語テストを行い、分からなかった単語については、考えられ得る文脈の中で使えるまで復習する必要もある。また、英作文の能力や英語の豊富な語彙力を養うトレーニングには、文法知識や英文の読解力を身に付ける機会を組み込むことで、より確実に受講学生の英語を用いた表現力を向上させることができると考える。本研究を通して、学生自身が自分の考えについて英語を用いて表現することへの自信をもつことが、小学校英語の授業を行う自信へとつながることが分かった。そして、図2の相関行列では問3と問9の相関係数が最も高く、0.84とかなり強い正の相関を示していた。これが意味することとしては、英語の発音への自信が強ければ強いほど英語のプレゼンテーションに対する自信が強くなるということである。英語を用いて自身の考えを発信する力は、このように様々な複合的要素に影響されながら養われるため、学生に提供する授業のアクティビティを検討する際には様々な英語運用能力に関する要素を取り入れる工夫が教員養成大学に求められていると言えるであろう。

#### 5 まとめと今後の展望

本研究は、英語を実践レベルで使用することができる人材を育成することによって、今後加速するグローバル化社会に適応できる人々として特に若い世代の増加に貢献できるポテンシャルを有している。本研究では、特



に教員養成大学に所属する学生が大学を卒業した後、実際に教育現場において小学校英語の授業を行う際に自信をもって授業実践に臨むことができる教員となるための方法を検討した。本研究で導き出された教育アプローチによって自信をもち小学校英語を教えることができる教員が増加すれば、授業を受ける側の児童も安心して授業に参加することができるようになり、長期的視点における効果として、児童の英語力向上につながると考えられる。このように、英語を実践レベルで使用できる児童を育成する教育に携わる教員の養成を通して、グローバル社会を支える次世代の人材育成への波及効果が期待され则认为る。

本研究で提案された教育アプローチに関しては、今後その教育方法が実際に学生の小学校英語の授業を行う自信を高める点において効果的であったのか評価する必要がある。今後は教育効果測定を含む授業の評価を通し、授業実践を重ねながら、より詳細な教育手法の提案をしたいと考えている。

## 引用・参考文献

- [1] Ethnologue  
<https://www.ethnologue.com/insights/how-many-languages/> (2024年8月16日閲覧)
- [2] WIP Japan Corporation 2024年最新版世界の言語ランキング(ネット人口含む)  
<https://japan.wipgroup.com/media/language-population> (2024年8月16日閲覧)
- [3] WORLD FAMILY'S INSTITUTE OF BILINGUAL SCIENCE 脳の発達の仕組みから考える、英語への「親しみ」の重要性～東北大学加齢医学研究所 瀧教授インタビュー(前編) <https://bilingualscience.com/english/%E8%84%B3%E3%81%AE%E7%99%BA%E9%81%94%E3%81%AE%E4%BB%95%E7%B5%84%E3%81%BF%E3%81%8B%E3%82%89%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B%E3%80%81%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E3%81%B8%E3%81%AE%E3%80%8C%E8%A6%AA%E3%81%97%E3%81%BF/#:~:text=%E8%84%B3%E3%81%AF%E3%80%81%E3%81%99%E3%81%B9%E3%81%A6%E3%81%AE%E9%A0%98%E5%9F%9F,%E7%99%BA%E9%81%94%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%8D%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82> (2024年8月16日閲覧)
- [4] 文部科学省：小学校外国語活動サイト [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gaikokugo/](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/) (2024年12月26日閲覧)
- [5] 文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課(2019)：新学習指導要領全面実施に向けた小学校外国語に関する取組について [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2019/09/11/1420968\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2019/09/11/1420968_2.pdf) (2024年12月26日閲覧)
- [6] 文部科学省初等中等教育局教職員課(2017)：教育職員免許法・同施行規則の改正及び教職課程コア・カリキュラムについて [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/27/1388004\\_2\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/27/1388004_2_1.pdf) (2024年12月28日閲覧)
- [7] 日本経済新聞(2017)：小学校の先生、英語必修に教職課程で義務化 [https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG26H92\\_W7A720C1CR8000/#:~:text=%E4%BC%81%E6%A5%AD%E3%81%A7%E3%81%AE%E8%A8%98%E4%BA%8B%E5%85%B1%E6%9C%89,%E5%8F%96%E5%BE%97%E3%81%8C%E5%BF%85%E8%A6%81%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%82%8B%E3%80%82](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG26H92_W7A720C1CR8000/#:~:text=%E4%BC%81%E6%A5%AD%E3%81%A7%E3%81%AE%E8%A8%98%E4%BA%8B%E5%85%B1%E6%9C%89,%E5%8F%96%E5%BE%97%E3%81%8C%E5%BF%85%E8%A6%81%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%82%8B%E3%80%82)

(2024 年 12 月 28 日閲覧)

- [8] 米崎里、多良静也 & 佃由紀子 (2016) 小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安-その構造と変遷 小学校英語教育学会誌 16 (01) pp132-146.
- [9] 渡部健介 (2010) 「小学校教員の英語力に関する自己評価」『中部地区英語教育学会紀要』第 39 号 pp63-70.
- [10] 酒井英樹 & 内野駿介 (2018) 小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評価—小学校教員養成課程外国語 (英語) コア・カリキュラムの点から— 小学校英語教育学会誌 18 (01) pp100-115.
- [11] 林彰子 (2020) 日本人英語教師の自信と自尊感情の関連についての考察 教科指導についての語りからの分析 言語文化教育研究 18 pp123-141.
- [12] Waterfield, M. (2019) A case study of an independent professional development project in a Japanese private secondary school. 『熊本大学社会文化研究』17 pp181-204. <http://hdl.handle.net/2298/42144> (2025 年 1 月 2 日閲覧)
- [13] Chen, Z. & Goh C. (2011) . Teaching oral English in higher education: Challenges to EFL Teachers. *Teaching in Higher Education* 16 (3) pp333-345. <https://doi.org/b74z75> (2025 年 1 月 2 日閲覧)
- [14] Song, J. (2016) Emotions and language teacher identity: Conflicts, vulnerability, and transformation. *TESOL Quarterly*, 50 (3) pp631-654. <https://doi.org/gcphdg> (2025 年 1 月 2 日閲覧)
- [15] Benke, E. & Medgyes, P. (2005) Differences in teaching behavior between native and non-native speaker teachers: As seen by the learners. In *Non-native*

*language teachers: Perceptions, challenges and contributions to the profession* (pp 195-215.) Boston, MA: Springer US. (2025 年 1 月 2 日閲覧)

## 謝 辞

本研究の実施に御協力を賜りました、現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科在学の「初等教科教育法 (英語)」受講の皆様に心より感謝いたします。